

2020年4月12日(日)

上尾合同教会 イースター礼拝

聖書 イザヤ書 22:15~22

ヨハネの黙示録 3:7~9

説教 「イースター・黙示録①⑥—三国の門を開く方」

武田真治牧師

普段の礼拝と勝手が違うので、しかし本当にイースターの礼拝が、いろんなことがありましたけれども、こうして皆さまと共に礼拝が捧げられたことを、本当に感謝です。

しかし、礼拝がこうして、いろんな事情がありますけれども、満足な形でできないというのは、本当に残念だな、と。また、こういうこともあるんだなということを教えられます。

昨年、11月10日からヨハネの黙示録を一緒に読んで参りました。そして、この黙示録2章と3章は7つの教会への手紙が記されております。エフェソ・ティアティラ・スミルナ、そういう教会への手紙が語られていて、今日は6番目のフィラデルフィアという教会への手紙を、一緒に読み始めます。

エフェソやスミルナ、ティアティラというのは古くからの町で、名前もそういう古い名前なんですけれども、フィラデルフィアというのはギリシャ語の名前なんです。フィロスという言葉と、アデルフォス。フィロスというのは愛情、アデルフォスというのは兄弟姉妹という意味です。だから、フィラデルフィアというのは、兄弟愛という、これは有名な言葉で聖書にも出てきますし、今アメリカでこれと同じ町が、都市がありますね。これは、キリスト教の中ではクリスチャン同志、兄弟姉妹として互いに愛していこうよ、という思いが込められている言葉であります。

古くはヨーロッパで、教会の名前にこのフィラデルフィアを使う教会もありました。土地の名前、例えば上尾市に上尾フィラデルフィア教会という、そういう教会も結構あります。地名とフィラデルフィアをつける。ただ残念ながら、この箇所が登場するフィラデルフィアの町の名前はキリスト教の信仰に基づいて付けられた名前ではありません。これは、紀元前150年頃にこの辺りを支配していたギリシャの都市国家の一つでありますフェルガモン王国という王国の王様で、アタロス二世、あるいは、アッタロスとも言いますけれども、アタロス二世がこの地域をギリシャの文化といいますか、ギリシャ化するギリシャの言語を地域に広めようということで、新しくギリシャ風の町を建築したのが、何もなかったところに建築したのが、このフィラデルフィアという新しい町ですね。

それで、その王様のアタロス二世、アッタロス二世が自分のお兄さんのエウメヌスという人物を非常に尊敬していた。アタロス二世のあだ名が、フィラデルフォス、つまり兄弟を愛する者という意味があったそうです。そう呼ばれていた。それで、新しく作ったその町をフィラデルフィア、兄弟愛という風に名付けたのだとされています。

おそらくは、ペルガモン王国という王国の首都はペルガモンという大きな町、このラオディキアや

サルデイス、ティアティラの前にペルガモンという教会が出てきますね。その町は大きかったんです。そして、ペルガモン王国の首都だったんです。そして、新しくできるこのフィラデルフィアという町が、お兄さんであるペルガモンの町と友好関係、まさに兄弟であるように良い関係を作って成長していくようにという願いも込められて、フィラデルフィア、兄弟を愛する、そういう名前を付けられたのではないかと考えられています。ですから、この地域には珍しくギリシャの文化、そしてギリシャの言葉が使われていたのがフィラデルフィアなんです。

今日の聖書の個所でイエスさまが、このフィラデルフィアの教会に対してこうおっしゃっています。7節-8節 8節の「あなたの前に」の「あなた」というのはフィラデルフィアの事ですね。門をイエスさまが、フィラデルフィア教会の前に門をずっと開いておいたんだという風におっしゃっています。そして、それは誰も閉じることはできないよ。なぜならば、私はダビデの鍵を持っている。だから、この鍵を持っているのは私なんだ、という風にイエスさまはおっしゃっておられるんですね。

なぜ、この扉とか門を開いておいたという事をイエスさまがおっしゃっておられるのか。おそらく、多分、こうだったんじゃないだろうかと劇場ですね。多分こうだったんじゃないだろうかと考えられていることは、この地域で、先ほど申しました新しい町とかフィラデルフィアの町が作られたわけです。新しい時代、新しい空気、文化といいますか、それを周りの人々に伝えていくためにこの町は作られました。ですから、特にギリシャ語でこの町は話されていました。

私たちが手にしている新約聖書というのは、全てギリシャ語で書かれています。黙示録が記された時代には、パウロの手紙とかマルコによる福音書、マタイによる福音書は既に出回っていたのではないかとされています。で、このフィラデルフィアがギリシャの町として、小アジアの地域、アジアの地域に、ギリシャの町として、ギリシャの文化やギリシャ語を語ることが広められていくためにこの町が立てられたということ。これは、この地域全体にキリスト教の伝道が広がっていくための、いわば拠点、最前線、そういう事とも考えてよいのではないかと。あるいは、そのようにイエスさまが導かれておられるんだ。

「私はあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に門を開いておいた。だれもこれを閉めることはできない。」(8節)もう、このギリシャの町フィラデルフィアを拠点にして、この地域全体に、キリスト教の伝道、あるいは聖書の言葉が広められていく。そういうことをイエスさまが思い描かれておられたんだ。だから、8節で「あなたの前に門を開いておいた」とあります。これから開くんじゃないんです。「もう開いておいた」セッティングされているということですよ。後はフィラデ

ルフィアの教会が、この教会を拠点にしてこの地域にキリスト教の伝道を、福音の伝道をしていけばいいんだよ。もうちゃんと道はつけたよ。門は開いたよ。そういう意味ではないかと、多分そうだったんじゃないだろうかと考えられています。

どうでしょうか。しかも門はだれも閉めることはできないと、非常に自信に満ちて語っておられます。これを読んで我々は、成功間違いなしだなという気がします。このフィラデルフィアの町で伝道し、そしてその町から周りへとどんどん福音を伝道していく。そうしたら、イエスさまがもういろんな条件を整えてくださっているのだから、これはもう絶対成功間違いないと。だから、「出て行け」と言われている。そうかもしれません。

明らかにフィラデルフィアの町は新しい雰囲気、新しいものを受け入れようとする町の状況も整っていましたし、ギリシャ語が使われておりましたし、新しい文化の担い手として誇り高いような、そのような町であった。

けれども、じゃあ、何もかも良かったのか。後はこのフィラデルフィアの教会が、もろ手に粟と申しますか、やること全てに成功していくようになる。「大丈夫だよ!」と言われてらっしゃる。でもですね、どうやらフィラデルフィアの教会そのものについてはなかなか大変さがあったということが、実は8節の途中から出てくるんですね。8節後半「あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないといわなかった」

『力が弱い。』ギリシャ語の原文では、「ミクロ、ミ克蘭・エケイス・ドゥーナミン」ドゥーナミンは<力>、エケイスは<あなたは持っている>、ミクロというのはミ克蘭、ミクラスという言葉で、「ミクロの世界」と申しますように、ウイルスも新型コロナウイルスも顕微鏡で見なければみえない。つまり<小さい>弱いというよりは、小さいという言葉です。ギリシャ語の反対の言葉が、メガスですね。メガトン級・メガサイズという、<大きい>。だからここで、フィラデルフィアの教会は力が弱い、つまり小さい、規模が小さい、小さかったんです。決して大きい教会ではなかった。

フィラデルフィアの町もまだ新しかったでしょうし、そこで教会の種が蒔かれたんですけども、そんなに大きな教会ではなかっただろう。小さな教会なんだ。小さい教会であつたけれども、「わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないといわなかった。」ここで何を言っているかという、その背後には迫害、圧迫があつたんだろうと。小さい教会なんだけれども、小さいが故に周りから迫害や圧迫を受けていたんだ。誰から受けていたのかというと、9節です。「見よ、サタンが集いに属して、自分はユダヤ人であると言う者たちには、こうしよう。実は、かれらはユダヤ人ではなく、

偽っているのだ。」

どうやら、ユダヤ教の人たちが、この小さなフィラデルフィアのある教会を圧迫し迫害していたんだと。どうでしょうか。既に、この前のスミルナという教会にもユダヤ人たちからの迫害があると出て参りました。イエスさまもパウロもペトロも迫害を受けてきた。しかも歴史的に少し見ますと、例えばちょっと前に、この時代の少し前に、セレウコス王朝でこの地域を支配していた王様のアンティコス三世は、バビロンに住んでいたユダヤ人 2 千の家族をわざわざ移住させて、市民権を与える代わりにそこら辺を開拓させたとあります。おそらく、このフィラデルフィアも、新しい土地に新しい町を作るときに、フェルガモンの王様は歴史には書いてないですけれども、ユダヤ人の幾人か、何家族か、何十か何百か判りませんが、移住させて、あるいは誘って、そこで入植させて町を、ユダヤ人の人たちは当時真面目だと考えられていましたから、そういう方策・政策をとったのではないかと考えられていますね。

そうするとそこには、ユダヤ人のグループが既にもう存在していたわけです。そこに、キリスト教が伝道されてきて、教会が出来るんだけれども、ユダヤの人たちにとってみれば、キリスト教というのは自分たちと反発するグループだと考えられますから、圧迫や迫害を受けていたのではないかと、考えられるわけですね。どうでしょうか。

「あなたの前に大きく広がっているんだよ。」これは、未来ですね。未来の事なんです、多分。それで、この後歴史的には、実はフィラデルフィアの教会はこの後この町自体も大きくなって、教会も大きくなります。歴史的にですよ。黙示録のこの後の時代。そしてさらに、この地域にイスラム教が入ってきます。そして、イスラム化されます。今のトルコですから。だけれども、このフィラデルフィアは、永く何世紀にも亘ってキリスト教の町として、実は栄えた。歴史的に事実なんですね。そして今日でも、トルコでは珍しいんですけれども、キリスト教の司教さんとクリスチャンが、多分千人くらいしかいないと考えられています。住んでいる町の一つになっているのが、このフィラデルフィアです。

イエスさまが、あなたの前には、もうこれからの将来、生き方、道、これからの人生、あるいはこの町の将来、そしてこの地域、ここは大きく門が開かれているんだよと言われたのは、まさにそうだったんだ、ということですよ。この時点では、そうなるとはわかってないですよ。わかってないにも関わらず、「いや、あなたの前には大きな門が開かれているんだよ。もう開いてあるんだよ。そしてこれは、だれも閉めることはできない。ユダヤ人であろうが、ローマ帝国の皇帝であろうが、閉める

ことはできない。門の鍵を持っているのはわたしだよ。」という風にイエスさまはおっしゃっておられる。

これは、未来の事に繋がることなんですよね。でも、でも考えてください。今のこのフィラデルフィア、この現実の状況というのは、小さいんです、規模が小さい教会だ。そしてユダヤ人からの圧迫を受け、迫害を受けて、存続自体も危ういんですよ。そういう教会に対して、イエスさまがおっしゃっておられるのは、「いや、今の現実には厳しいかもしれない。今の自分たちの置かれている状況はとっても大変かもしれない。もうそれこそ逆に自分たちを守るだけで精一杯の状況かもしれないけれども、門は開いているんだよ。可能性が豊かにあるんだよ。そして、わたしがセッティングし、わたしが導くんだ。」だから、元気を出せ、ということじゃないでしょうか。「勇気をもって伝道していこうよ。可能性はいっぱいあるんだ。この町は、そしてこの地域は、キリストが祝しキリストが、イエスさまがセッティングして下さった場所なんだ。ここで、あなたたちはね、大丈夫だよ。伝道していけば、大きく道が広がっていく。門が開かれているんだよ。」ということ。

このイエスさまの言葉、「門が開かれているんだよ。道が広がっているんだよ。」という将来に向けての言葉を、この時点でフィラデルフィアの教会の人たちが「いやいや先生、イエスさま、どうしても大変なんです。我々全然力ないですよ。もう無理です。」と何もしなかったら、あるいは打って出なければ、あるいは自分たちで守るだけ、迫害に耐えてひたすら身を縮めて生きていただけであったならば、あるいは教会が消滅してしまっていたら、後々のフィラデルフィアの、先ほど申しましたように、イスラムの中でもキリスト教の町として保っていった、何世紀も保っていった。そして今でもクリスチャンがここに住んでいるような、フィラデルフィアの町にはならなかったんです。この時点で、諦めてしまっていたら、この時点でフィラデルフィアの人たちが、自分たちはマイクロだと、小さい、こんな群れに何ができるんだと。我々は本当に迫害の状態、厳しい状態にある。こんな私たちに何をしようと、イエスさま、あなたはおっしゃるんですか。できませんよ、という風に現実の状況ばかり条件を数え上げて、「ああ、やっぱり出来ないや。無理ですよ。」って何もそこで行動を起こさない、あるいは、ただ過ぎ去るのを待って行くという事であってしまっただけならば、後々のせつかく開かれている町への道や門が、結局は閉ざされていったかもしれない。

そのことを思う時に、このイエスさまの言葉というのは、今を見てないんだなと私は思いました。イエスさまは、私たちに対して、今の状況や今の現実だけを見て、大変だよ、頑張ってね、そんなことだけをおっしゃっておられるのではなくて、将来なんですよ。もっと遠くを見てらっしゃった

んだなあという気が致します。これはとっても素敵な条件があるじゃないか、こんなに門が開かれているじゃないか。こういう大きな道が備えられているじゃないか。出て行こうよ。意気消沈しないで、とっても可能性が深い、広い、広がっているんだよ。だから、歩みだそう、恐れず歩みだせ。という風にここでおっしゃっておられる言葉なんだと、そう思います。どうでしょうか。

私たち、このフィラデルフィアと今の上尾とは、少し違うかもしれませんが、こういうところではいろんな条件を、それぞれマイナスの条件、今の現実の条件をあげたらいっぱいマイナスの条件があるかもしれない。でも、ここにイエスさまが種を蒔いてくださった。この教会、まだまだね、あなたの前に門は広がっているじゃないか。この門は、誰も閉めることはできないんだ。わたしが開けた以上、誰も閉めることができない。迫害があるかもしれない。小さいかも知れない。けれども、そんな条件を並べても、並べてしまいたい思いはあるんですけど、そうではなくて、大丈夫だよ。我々の人生もそうかもしれません。

いろんな現実の状況が、それぞれ条件の悪さを数え上げたらいっぱい数え上げることができるかもしれません。こんなことがあります。こんな状況です。大変です。もう、嫌になります。何とかしてください。できません、という風にいっぱい条件はあります。無理ですっていう条件。今回のウイルスの脅威、もう本当にいつまで続くんだろうか。と、考えますと、本当に途方に暮れてしまうんですけど、しかし、イエスさまはちゃんと私たちの中に門を開いてくださった、備えてくださった。誰も閉めることできないよ。だから、恐れず歩み出せ。これはまさに私たちへの御言葉ではないかなと、今日与えられた言葉ではないかなと、私は本当に思いました。

今日、このイースター、これからもしかしたら来週礼拝を持たないような状況にある私たちに対して、いや、門は閉まってないんだ。これで門が閉まる、礼拝の、教会の門が閉まる。そんなことはない。門はもう開いてる、だって「閉めるのはわたしだ」っておっしゃるわけでしょ？だれが閉める？わたしが閉める。政府じゃない。政治家じゃない。「わたしがダビデの鍵を持っている。わたしが閉めるんだ。わたしはずっと開けっ放しにしておくよ。御覧なさい。」

そして、今日はイースターであります。イースターというのは、イエスさまの復活をお祝いするわけですね。これは何かというと、イエスさまが十字架に架かってくださって、死んで甦ってくださった。結果、天への門が開かれた。これがイースターです。

天への門をイエスさまは開いてくださったんです。それで、その門はもう閉じないんだとおっしゃっています。その天への道がもう通じた。もうセッティングしたよ。イエスさまが復活、自ら復活なさ

ってくださいって、ほら、道はもう付いたよ。もうセッティングしたよ。もう門は開いているよ。これはもう閉じない。

私たちは主を見上げながら、信じて歩みだすんです。そしてこの地上の歩みをちゃんと歩みぬいて、天の御国へと迎え入れられる。天への門へと繋がる道が、それぞれにもう備えられているんだと、そのことを信じて。

条件はね、現実には厳しいかもしれない。けれども、将来、未来までもイエスさまが見抜いて、天への門を、天への道を、そして私たちのこの教会への門を開いてくださっている、この地域への門も開いてくださっている、ということを知って、歩いて行きたいなと思います。そして、御国で、我々が死んだ後に御国で、イエスさまの御顔を仰ぐときに、こう言われるんです。「あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らない、と言わなかった。よくやったな。」最期にそう言われるんじゃないか。「あなたは力が弱かった。けれども、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないと言わなかった。ありがとう。良く生きてきたね。」と、そう御国でイエスさまから言葉を戴けるような者でありたいなと、本当に、本当に願います。お祈りを致します。

天の父なる御神さま、出来ない条件を数え上げてしまいます。

祈りの中でも、こんなことがあります、あんなことがあります、と自分が出来ない条件をあげてしまう私たちでありますけれども、主よ、憐れんでください。

あなたは、そんな私たちに対して、「もう門が開いているじゃないか、もう道は備わっているよ。勇気をもって歩み出していけ。」と、その言葉をかけてくださっています。

どうなるか分かりません。このウイルスのことで、私たち、全く未来も見えないような状況ですが、あなたはそんな私たちに道を備えてくださっているということを知って、一歩前に歩み出すことが出来ますように、導いてください。

この上尾にある教会、どうぞこれからもこの地域に門が開かれているその門として、私たちがいつも地域に、門を、教会の門を開けていける者となりますように。

この日本、この世界に、どうぞ主よ、あなたからの導きと癒しと、本当にこの病、そしてこのウイルスのことを主よ、取り除いてくださいますように祈ります。

今日は集えなかった同じ礼拝の友の上に、特にあなたからの祝福とお守りとが、変わらず注がれますことを祈りつつ、この祈り、イエスのみ名を通してお捧げ致します。